

SONRISA

そんりさ

vol. 184

滞在と移動のプロセス…

メキシコ・グアテマラ国境の事例



タパチュラの中央公園。滞在先のない移民の人々が夜を過ごす場所（写真：黒宮亜紀）

- | | | |
|----|---------------------------------------|------------|
| 02 | 滞在と移動のプロセス：メキシコ・グアテマラ国境の事例 | …黒宮 亜紀 |
| 07 | 2017年人口センサスでみるペルー社会（2） | …村井 友子 |
| 11 | 女の子にも教育を—グアテマラ土曜学級の視察より— | …新川志保子 |
| 13 | 回想のラテンアメリカ ケーデター後のチリへ | …唐澤 秀子 |
| 15 | ペルー音楽 ラテンアメリカにおけるフェミニズムを
めぐる歌の旅（2） | …水口 良樹 |
| 17 | ラ米百景 詩人パブロ・ネルーダの死因は毒殺か？ | …伊高 浩昭 |
| 18 | メキシコ料理 牛肉のウスターソース味 | …ミゲル・アクーニャ |
| 19 | ムネちゃんのLA情報拾い読み・斜め読み | …小林 致広 |

2023年4月22日 日本ラテンアメリカ協力ネットワーク（RECOM）発行

滞在と移動のプロセス：メキシコ・グアテマラ国境の事例

黒宮 亜紀（メキシコ南部国境大学）

メキシコ合衆国チアパス州とグアテマラ共和国サン・マルコス県の間にある国境はスチアテ川によって形成されている。もっとも太平洋岸に近いスチアテ（メキシコ）とテクン・ウマン（グアテマラ）の間には二つの橋が架り、一つは大型トレーラーなどの輸送車用、もう一つは自家用車で歩いて渡ることでもできる。この橋の両端には両国の移民局や税務局があり、いわゆる「公的な越境ルート」である。

その橋のすぐ下を大きなタイヤとベニア板で作った筏が人や商品を乗せて行き来している。季節によって水量は変化するが、兩岸はおおよそ 200mほどの距離である。移民法から見れば、この移動は「不法行為」になるが、双方の地元住民にとっては川の向こう側とこちら側を行き来するだけの日常生活の一部で、生計を立てるための必要手段でもある。

グアテマラからメキシコへは、新鮮な野菜と安価な労働者（特に商人、農園従業者、家事労働者）が渡っていく。メキシコからグアテマラへは、シャンプーやトイレットペーパー、歯磨き粉、石鹸といった日用品が大量に仕入れられ、その後は国内の市場に出回る。これは国境を渡ることによって生まれる人や物の価値の差を利用した往来なのである。

経済活動だけでなく、家族に会うためこの移動が利用されることもある。地元住民は、特に出入国手続きをしなくとも橋を渡り、国境を「正規に合法に」渡ることができる。しかし、商品や野菜を大量に仕入れたり、許可されていない経済活動（地元住民の滞在資格での経済活動は禁止）をしたりする場合は、川を筏で往来することになる。単に筏で渡ったほうが時間的に早いからという理由もある。

メキシコ側川岸では国家警備隊 (Guardia Nacional) や移民局の局員が監視している。しかし国境沿いの町の範囲での人やモノの流れは、麻薬や武器でないかぎり取り締まられることはなく、ときおり身分証明書の提示を求められる程度である。だが人の移動が国境周辺ではなく、スチアテから北へ約 35 km のタパチュラを越え北に向かうと、状況は大きく変わる。



スチアテ川。対岸がグアテマラ。左手奥の歩行者・自家用車の橋の下を筏が往来する（写真：筆者）

国境の町：タパチュラ

人口約 36 万（2020 年度）のタパチュラは、チアパス州都トゥストラ（約 60 万）につぐ人口規模で、チアパス州の国境沿いの町としてもっとも重要な都市である。タパチュラのあるソコヌスコ地方は、19 世紀後半から中南米だけでなくドイツ、日本（榎本殖民の入植地）、中国、スペインなどから多くの移民が入植し、文化的多様性にあふれている。マンゴーやバナナ栽培、コーヒー農園といった農産業が活発な地域の中心地タパチュラは、周辺地域の住民が集まる場所でサービス産業も発達している。

チアパス州はメキシコでもっとも貧困層の多い州のひとつで、タパチュラ市の住民の約 7 割が貧困層に分類されている。都市としての基本的サービスが不足し、交通・情報インフラへのアクセスも不十分で、安定した経済活動を行う基盤が整っていない。タパチュラは移民の受け入れ都市として発展してきたが、1990 年代降は、中南米からアメリカ合衆国を目指して「不法に」^注越境してくる人々の通過地点としても重要な役割を果たしている。

時代とともにその人の流れの特徴は様々に変化してきたものの、タパチュラが北と南をつなぐ「通過地点」であることは変わっていない。2018 年以降

注) 不法 (illegal) という言葉は現在では公的場面や学術論文などではほとんど使用されない。ビザ取得の有無は行政的問題で、刑事罰を連想させる「犯罪」ではないからである。本稿では「不法」という言葉を使うが、これ自体見直されるべき概念である。

は、多くの国籍の人が滞在するようになった。中南米出身の人々が多いが、近年はハイチ出身の人々が多くなっている。キューバやベネズエラ、コロンビアに加え、アフリカ諸国から北上してくる事例もよく見かける。ハイチからくる人の多くは10年以上前に出国し（2010年の地震が主なきっかけ）、その後はブラジルやチリなどで難民認定をうけ、それぞれの国籍を取得して暮らしていた。しかし、政治的・経済的不安定から、よりよい生活を求めアメリカ合衆国を目指して、南米から陸路で国境を越えメキシコに辿りついたのである。

彼らがメキシコを「合法」で「安全」に縦断するには滞在資格を取得する必要がある。方法としては人道的理由による短期訪問者ビザ（半年～1年）、または入国管理用紙に記入のうえで出国通達書（30日以内の出国を義務付ける書類 Hoja de Salida）を入手することなどがある。現在では、難民資格を取得したうえで、メキシコ永住権を獲得し、その後アメリカ合衆国に渡るとするのが主流である。特にハイチ出身の人々にはこれがほぼ唯一といえる方法となっている。

難民申請は申請を行った都市に留まることがその条件の一つになっている。そのため難民申請者は移動を中断し、申請を行う事務所（メキシコ難民支援委員会、COMAR）があるタパチュラに一時的に停留することになる（チアパス州パレンケ州、タバスコ州テノシケ、ベラクルス州アカユカン、メキシコシティ、バハカルフォルニア州ティファナ）。

一時的と言っても期間は決まっておらず、状況

表1. COMAR 事務所別の難民認定申請件数と人数の推移

COMAR 事務所	2020年		2021年		2022年	
	件数	人数	件数	人数	件数	人数
ティファナ	1,306	1,676	2,462	3,683	2,406	3,416
メキシコシティ	5,840	7,714	11,922	18,101	12,798	17,364
タパチュラ	17,146	26,503	48,849	89,540	46,127	76,239
パレンケ	124	157	3,437	5,689	5,452	7,967
テノシケ	1,988	2,745	4,323	7,110	2,976	5,728
アカユカン	1,574	2,119	3,484	5,668	5,595	7,764
合計	27,978	40,914	74,477	129,813	75,345	118,487



政府の短期雇用プログラム登録に集まる難民申請者（写真：筆者）

しだいで少なくとも3か月、長くなると2年以上も「滞在」しなければならない。2020年にはコロナウイルスの影響で、一時的に難民申請者は減ったが、移民や難民申請の手続き業務も中断され、多くの人々が収入も社会保障もないままタパチュラに留まり、不安定な生活を強いられた。COMAR公表の2022年統計では、メキシコの年間の難民申請75,354件のうち46,127件（61%）はタパチュラで行われ、人数で76,239人に相当する（表1）。タパチュラ市人口の2割に相当する7万人強の外国人が2022年を通じてタパチュラに一時滞在していた。表2にあるように、近年はホンジュラスやエルサルバドルだけでなくハイチ、ベネズエラ、キューバなどから申請が増え、注目すべきは申請者の多国籍化である。その他の国籍に分類される申請者が2020年の1,200人程度から2年で9,000人近くまで増えている。

表2. 国籍別の難民認定申請人数の推移

	2020年		2021年		2022年	
	国籍	人数	国籍	人数	国籍	人数
1	ホンジュラス	15,364	ハイチ	50,954	ホンジュラス	31,086
2	ハイチ	5,909	ホンジュラス	36,080	キューバ	18,087
3	キューバ	5,712	キューバ	8,249	ハイチ	17,068
4	エルサルバドル	4,011	チリ	6,893	ベネズエラ	14,823
5	ベネズエラ	3,241	ベネズエラ	6,123	ニカラグア	8,971
6	グアテマラ	3,002	エルサルバドル	5,944	エルサルバドル	7,803
7	チリ	806	グアテマラ	4,121	グアテマラ	5,271
8	ニカラグア	803	ブラジル	3,800	ブラジル	2,592
9	コロンビア	496	ニカラグア	2,894	コロンビア	2,482
10	ブラジル	368	コロンビア	1,236	ドミニカ共和国	1,421
	その他	1,202	その他	3,497	その他	8,874

*チリ、ブラジルに関しては、各国の国籍を取得したハイチ出身者が主である。

出典：<https://www.gob.mx/cms/uploads/attachment/file/792337/Cierre>

_Diciembre-2022_31-Dic.1.pdf

移民政策と移民の人権保護というディスコース

このような状況になった背景については、多岐にわたる要因や出来事が複雑に関係しており、多方面からの考察が必要となる。まず挙げられるのがアメリカ合衆国の移民政策の影響を受けて、メキシコ南部国境の取り締まりが強化されたことがある。これは近年に新たに始められたことではなく、2000年代からアメリカ合衆国の援助を受けて南部国境の移民関連の検問インフラやそれに伴う人員の増強などが行われてきた。2016年、タパチュラにはラテンアメリカで最大規模（約千人収容）とされる「不法移民収容所」Estación del Siglo XXI が建設された。

これらは、2001年9月11日（米国同時多発テロ事件）から、移民を取り締まることが国家安全保障の観点から正当化されたことと無関係ではない。またトランプ政権がコロナ対策を名目に2020年3月に導入した「タイトル42」のもとで、難民申請した人はメキシコ国内に滞在し待機しなければならない政策がとられた。この政策はバイデン政権のもとで失効すると思われていたが、現在も維持されたままである（2021年6月停止も、連邦裁判所の判決を受け12月再開）。バイデン政権発足（2021年1月）前後に、「タイトル42」の失効を期待して多くの移民がメキシコの北部国境の都市に押し寄せ、滞在するという状況が作られるようになった。

このような状況を緩和するため、メキシコ国内を北上する人々をできるだけ南部に留めおく方針が採られたのである。例えばタパチュラから北上するには、そこから約300km続く幹線道路に配置されている11以上の移民局や国家警備隊の検問所を通過しなければならない。アンドレス・ロペス・オブラドール政権下の2019年に設立された国家警備隊は、国境地域の治安取り締まりとともに、移民の「人権保護」を行うことも目的として謳っている。

これまでもメキシコの南部国境は、アメリカ合衆国を目指す中南米出身の人々の通過地点であった。その多くは、貨物列車に隠れ（2008年頃まで、その後は貨物列車も機能しなくなった）移動するか、密入国業者に高い金額を払って、「不法移民」として越境し、当局から隠れるようにアメリカ合衆国まで移動していた。たとえ多額を払ってい



南部国境からタパチュラ市に入る幹線道路の移民局検問所。
（出典：El Heraldo del Chiapas, 2020年6月20日）

たとしても、不法なルートでの移動は、列車の事故や当局に捕らえられ不当な扱いをされるなど、つねに生命の危険を伴うものである。さらに密入国業者と麻薬犯罪組織が非常に近い関係にあるため、犯罪組織によって拉致・恐喝され、犯罪活動に強制的に加担させられるだけでなく、集団で殺害される事件も発生している。こうした状況は以前から問題視されてきた。

これらの問題が表面化するにつれ、多くの「不法移民」が犯罪組織の被害者となることを防ぎ、彼らの人権を守るための「治安維持」が求められるようになる。そのため、国家警備隊が国境の安全を守りながら、「違法」な人の流れを取り締まることが必要という言説が生まれてきた。つまり、違法な人の流れを取り締まり、「合法的」移動を推奨することが移民の保護になるという考えである。これには、国連が打ち出した「安全で秩序ある正規の移住のためのグローバルコンパクト」の制定と批准も関係している。このグローバルコンパクトに沿った「人権保護」を目的として、メキシコの移民政策は進められてきた。その結果、メキシコ国内を移動するには、タパチュラに「滞在」し、難民申請または移民手続きを行うことがほぼ唯一の手段となってきたのである。

さらに重要な出来事として、2018年10月、数千人もの人々がホンジュラスからグループを作って集団でメキシコ・グアテマラ国境を渡ってきた「移民キャラバン」（または「中南米キャラバン」）があげられる。これは組織的犯罪から身を守り、移動中に当局によって摘発・送還されないようにしようとする集団的戦略に基づき組織されたもので、その後も「移民キャラバン」は毎年のように組織されている。

その規模の大きさから、「移民キャラバン」は国内外の政府やメディアの注目を集め、移民の人権保護と国境における国家安全という二つの視点から研究・分析されている。この「移民キャラバン」における移民の人権の「危機的状況」だけでなく、こうした大規模な人の流れによって国家の「危機的状況」も引き起こされているという見方が芽生え、当局による「移民の管理 (Migration Management)」が重要と考えられるようになっていったのである。

しかし「移民キャラバン」という大規模な人の流れが始まったことによりによって、かねてより問題となっていた当局の対応力、管理力不足がさらに悪化するようになってきている。タパチュラにあるCOMAR 事務所や移民局は、恒常的な予算、人材、インフラ不足に直面している。

入国者が最初にするのは、難民申請の書類を提出する日を予約することである。しかし、予約をするだけでも長蛇の列に並ばなければならない。難民申請の書類提出の予約ができて、予約日まで3か月ほど待たなければならないのが、2023年初頭時点の状況である。その間、入国者は難民申請予定者というステータス以外の身分保証を得られず、メキシコ政府の支援対象にもなっていない。

申請ができて、その後のインタビューまでさらに半年近く待つことも度々あるという（申請者の状況による）。難民申請が受理されるまで数年もかかるケースも多くみられる。さらに数万件の難民申請を処理するための行政的手続きやその要件はたびたび変更されている。手続きに関する情報不足、伝達不足も相まって、難民申請や移民の手続きは日々の大きな混乱のただ中で行われている。

移民を送還するため資金も不足しており、帰国を希望して当局に出頭する人を送還する資金がなく、そのまま放置されるケースも相次いでいる。そもそも送還措置は送還先の国が受け入れる状況にあると確認でき、両国の合意がなければならない。しかしハイチからの難民の場合のように、双方でこうした連携をとることが難しくなっている状況も起きている。これらの要因が重なり、多くの外国籍の人々がタパチュラに一時滞在し、先の見えない時間の中で日常生活を構築しているのである。



2021年8月の移民キャラバン。国境からタパチュラまで
徒歩移動（出典：Diario del Sur, 2021年8月21日）

難民申請者たちの日常：滞在を内包する移動

不安定で恒常的な欠乏状態で、子どもたちへの教育サービスも滞在期間中の経済的保障もない難民申請者は、タパチュラでどのように過ごしているのだろうか。コロナウイルスが蔓延していた時期には、医療サービスの不足も目立っていた。住居の賃貸料も高騰し、数えるほどしかない民間避難所にも空きがなく、公園や道路での路上生活を強いられている人々も多い。特筆しておきたいのは、ヨーロッパ諸国にみられるような難民キャンプは、タパチュラには存在しない。難民申請者は各自で避難所を見つけたり、賃貸物件を見つけたりして、町の日常の一部となっていく。

前述のように、タパチュラの地元住民の多くは裕福な暮らしをしているわけではない。慢性的な都市サービスの不足（水道サービス、電気、街頭、ごみ処理など）、不当な労働環境、教育、医療サービスの不足も顕著である。これは移民を受け入れる側の都市の背景としてとても重要なポイントである。限定された物理的インフラのなかでは、移民の存在によって限られた資源をめぐる地元住民との競合が発生することになる。その意味で、文化的「他者」との共存を望めるような社会的基盤がタパチュラでは極めて脆弱であると言えない。

タパチュラ市の自治体としての役割は非常に重要となってくる。しかし予算不足と行政的能力、人材不足、さらには短い任務期間（基本的に3年、最近再任が認められるようになった）といった背景があり、移民と地元住民の両者を総合的に長期的に支援していく政策の執行を困難にさせている。



移動式簡易売店 (写真: 筆者)



公園などで小商りするハイチ移民
(出典: QuéPasa, 2022年11月22日)



唇を縫った「静かなデモ」
(出典: BBC Mundo, 2022年2月18日)

現在、タパチュラでは50を越える公的・私的団体が移民を対象にした支援プログラムがある。当然ながら、増え続ける滞在者全体に支援が行き届くことはない。公的機関による支援としては、社会福祉省の短期雇用プログラムや難民申請が通った人を対象にした転住プログラム(マキラドーラがあるメキシコ北部へ移動)がある。しかし大半の滞在者は、移動式の簡易売店で菓子やスナック、飲料水などを売り歩いたり、商店で通訳者として働いたり、市場の倉庫で寝泊まりしながら運搬の仕事を手伝ったりし、何とか細々と生計を立てている。

遅々として進まない難民資格の取得手続き、必要な情報も不足しているなか、難民申請者はそれぞれの方法で解決策を模索している。例えば移民局のまわりでは移民たちによる抗議が度々行われ、警察部隊と衝突することもある。またデモの常套手段ともいえる幹線道路の封鎖も繰り返し起きている。しかしこれらは地元住民やメディアによるいわゆるヘイトスピーチを増加させてしまい、こういった行動が実際に手続きの迅速化や効率化に直接つながるわけではないと考えられている。一方、中央公園では、ハンガーストライキだけでなく、実際に唇を糸で縫って行う「静かなるデモ」も行われてきた。

2021年以降、大規模なキャラバンでタパチュラ市から脱出することが試みられた。これらのキャラバンの多くは国家警備隊に暴力的に解散させられ、強制的(違法)に南部国境から国外退去させられた。しかし30~90日の猶予の国外退去処分(出国通知書)でアメリカ合衆国へ渡るといった手段がとられた例もあった(グアテマラ退去には手続きがなく、グアテマラから再入国、手続き再開する例が多い)。

またタパチュラ市当局によって、移民や難民申請

者に対する様々な活動の制限が出されてきた。市場のまわりで商売を行う移動式売店に関しては、何度も禁止令が出され、商品が押収されることもあった。2023年初頭に中央公園の改修工事が始まり立入り禁止となり、公園で寝泊まりしていた人々は、別の宿泊場所を探し、さらに劣悪な環境のもとで夜を過ごすことになった。移民局の周囲には、地元住民による移民局移転を要求する横断幕も張り出されている。一方、多くの移民がタパチュラに滞在することによって、地元の経済活動が成長してきていることも否定はできない。また文化的交流や、地元の若者グループによる難民申請者や移民といった「一時的滞在者」に対する支援活動なども盛んになっている。

従来の「伝統的な」移民だけでなく、「一時的滞在者」という新たなかたちの移民も、タパチュラという都市の恒常的な構成要素となっている。こうしたなかで、今後、タパチュラが政治的、社会的、文化的にどのように変遷していくのだろうか。そのプロセスを追跡することが今後の研究テーマの軸である。

「安全で秩序ある正規の移住」というグローバルスタンダードは、その過程で不安定で不足にあふれた「滞在」を移動する人々に強要していることはタパチュラだけでないことを特筆しておきたい。「不法移民」の人権保護という名目のもとで移動が管理されることで、彼らの移動は中断された状態におかれている。しかし「滞在」を余儀なくされている「移動する人々」を支えるシステムの構築やその滞在を保障する基盤となる物理的・社会的・政策的整備不足は深刻で、タパチュラの自治体や街の変遷、そして移民の人々の日常生活の事例はこの問題をよく表している。

Aki Kuromiya (El Colegio de la Frontera Sur)

1 2017年センサスの実施

ペルーは、南米大陸の北西の太平洋岸に面した国で、エクアドル、コロンビア、ブラジル、ボリビアおよびチリと国境を接しています。日本の約3.4倍にあたる国土面積約128.5万km²の中央にはアンデス山脈が走り、その東側には、世界一広い熱帯雨林地帯アマゾンが広がっています。この変化に富んだ地勢は、大きく海岸(Costa)、山岳(Sierra)、熱帯低地(Selva)の3つの地域に大別され、国土は、24県(Departamento)とカヤオ憲法特別郡(憲法で県レベルに位置づけ)、196郡(Provincia)、1,874地区(Distrito)に行政区分されています。

2017年人口・住居センサスは、ペルー全土の全居住者を対象に実施されました。実施期間は都市部と農村部で異なり、都市部では、2017年10月22日(日)をセンサス実施日とし、1日でセンサス調査を完了するため、午前8時から午後5時までの時間帯の外出を禁じて調査員による戸別訪問調査が一斉に行われました。一方、農村部では、ペルーの多様な地理的条件を考慮して、10月23日(月)から11月6日(月)までの15日間実施されました。これに加え、先住民族コミュニティ(共同体)に調査対象を絞った先住民族コミュニティ・センサスもセンサス実施期間中に実施されました。

2017年のセンサス実施にあたり動員された調査員数は約62.5万人で、中等教育修了者、大学生、専門学校の学生などの若年層を主体とし(Semana económica 2018.6.28)、なかには在ペルーのベネズエラ人をはじめとする外国人も含まれていました(Perú 21 Online 2017.10.23)。人口がペルーの4倍以上あるメキシコの2020年センサスの調査員数は14.7万人(村井 2022c)で、これと比べると、ペルーの調査員数はかなり多く感じられます。これは、都市部の戸別訪問調査を10月22日の一日で終わることが目標に掲げられ、調査員が一斉に戸別訪問調査を行い、人海戦術で都市全域の住居を網羅する必要があったためと考えられます。

なお都市部でも、センサス実施日に住民不在等の理由で、集計できなかった住居の調査は、センサスの終了日の11月6日まで続けました。

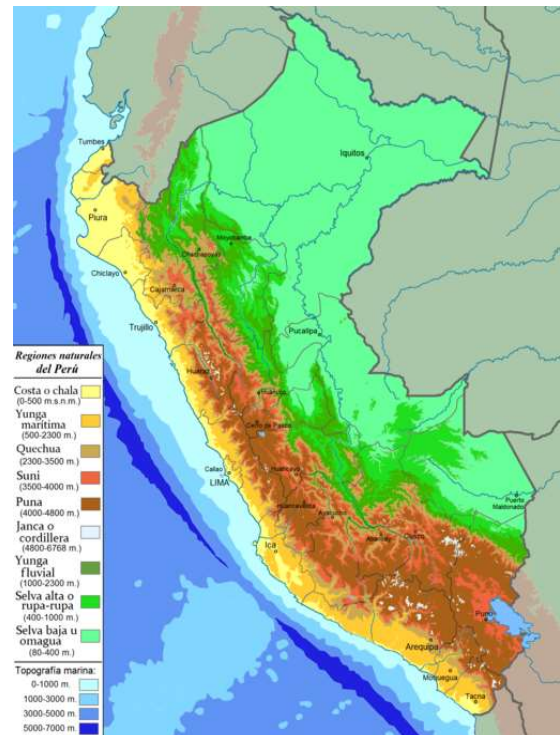


図1 ペルーの地形図 (出所: Wikimedia Commons)

実は、この2017年センサスは、実施期間中に起きた様々な混乱がメディアで報じられました。そもそも、一部の例外を除き、都市部の全住民に10月22日の外出を禁止し、許可なく外出した場合、警官から尋問を受け、警察署に連行されるという半ば強制的な外出禁止令に対する不満が存在していたところに、住民が自宅待機していたにも関わらず、事前の登録漏れにより、調査員の訪問を受けなかったブロックがあったことが判明しました。

調査員の準備不足や段取りの悪さによる調査の遅延などもあり、センサスの実施機関の国立統計情報庁(Instituto Nacional de Estadística e Informática, INEI)に対する市民の不平・不満・苦情がSNSなどにあげられました。これに追い打ちをかけるように、センサス実施日の翌23日にリマの女性調査員が戸別訪問調査の際に住人から性的暴行を受けた事件が発覚し、INEIに対する世論の批判はピークに達しました(dpa Servicio Internacional en Español 2017.10.24)。

同年11月に世論調査会社Pulso Perúが実施した世論調査では、センサスの不評が一因となって、

当時のクチンスキー大統領の支持率は26%まで落ち込み、センサスの結果を信頼しないという回答が全体の7割を占めたことが報じられています(Perú 21 Online 2017.11.4)。

2017年センサスの集計結果は、当初予定していた2018年1月から5か月遅れて6月に公表されました。2017年センサスの戸別訪問調査で訪問した住居は合計10,102,849戸、集計人口は29,381,884人でした。これに対し、住民が不在、事前の登録漏れなどの理由により、センサス調査実施終了日までに戸別訪問によって集計できなかった人口が推計1,855,501人(全人口の5.94%)、総人口は推計31,237,385人と発表されました(INEI 2018c)。

表1のとおり、2017年センサスの未集計人口は過去最多で、1993年センサスの3倍以上、2007年センサスの2倍以上、全人口比で比べても両センサスの2倍以上という結果になりました。この結果を招いた要因として、イプソス・ペルーのアルフレド・トーレス社長は、事前準備の全国巡回調査(プレ・センサス)の不備を挙げ、地図作成時に見過ごされたブロックやビルの存在を指摘しました。さらに、専門家の中から、実際の未集計人口は185万人を上回るという意見もだされ論議を呼びました(Semana económica 2018.6.28)。

世界的にみると、人口センサスの実施方法は近年大きく変化しており、ペルーが実施している調査員が国内の全世帯を戸別訪問し、全住民の悉皆調査を行う方法とは異なる手法で調査を行う国が増えています。具体的には、調査票によりデータを収集する“伝統型センサス”に対し、フィールド調査を行わず行政記録情報(行政機関の職員が職務上作成・取得した情報)に基づき統計作成を行うセンサスは、“レジスター型センサス”と呼ばれています。また“混合型センサス”は、行政記録情報と調査票の双方を用いて統計作成を行う手法です(伊藤 2017)。2020年ラウンドセンサスでは、例えば、シンガポールのように行政が管理している住民データから年齢や性別、エスニック・グループなどの基本データを収集し、これにオンライン回答や電話調査を組み合わせ、オンライン回答や電話調査でも回答がなかった場合に、対象者の自宅へ調査スタッフが直接訪問して調査が行われるという3段階でセンサスが実施された国もありま

実施年	総人口 (推定)	センサス 集計人口	未集計人 口(推定)	未集計人口の 対総人口比
1940	7,023,111	6,207,967	815,144	11.6%
1961	10,420,357	9,906,746	513,611	4.9%
1972	14,121,564	13,538,208	583,356	4.1%
1981	17,762,231	17,005,210	757,021	4.3%
1993	22,639,443	22,048,356	591,087	2.6%
2007*	28,220,764	27,412,157	808,607	2.9%
2017	31,237,385	29,381,884	1,855,501	5.9%

*調査拒否のアヤクーチョ県ワマンガ郡カルメン・アルト地区含まず

表1 センサス集計人口と未集計人口の内訳(1940~2017年実施分)

す。シンガポールの2020年センサスでは、オンラインで回答した人が全体の64%を占めました(土佐 2021)。

行政記録を利用するメリットとしては、1) 調査票によるデータ収集等にかかる経費の削減、2) 統計作成頻度の増加(センサスは通常10年に1度の実施ですが、行政記録情報を用いてデータを更新することで頻度を上げることが可能と考えられています)、3) 回答者の負担の軽減が挙げられます。ただ導入の前提としては、1) 行政記録の統計への使用を可能とする法的枠組み、2) 高品質で全土をカバーする人口レジスターの確立と、それを継続的に更新するシステム、3) 様々な行政記録で採用されている概念や定義の調和、4) データの効果的な連結を促進するための個人識別(一意のID)システム、5) 様々な記録に含まれるデータの適合性を確認するための品質と一貫性のチェック、などが必要です。これらの実現には、行政記録のデータの質の問題、統計記録を確立し維持する組織的な能力など多くの課題が横たわっています(United Nations Statistics Division 2022, 高橋 2022)。

ペルーの行政記録はレジスター型センサスに活用できる状態からはほど遠く、インターネット普及率が全国平均28.2%、アンデス地域先住民のアクセス19.8%、アマゾン地域先住民のアクセスが9.8%(INEI 2018a)に過ぎないペルーでは、オンライン回答による効率化を図る以前に情報通信ネットワークの整備が必要です。多様な民族が集住する多民族国家ペルーの国土は日本の3.4倍と広大なうえに、アンデス山脈の高地やアマゾンの熱帯雨林地帯など、外部からのアクセスが困難な場所

に村落が点在し、人里離れた村にたどり着くため、川や溪谷、ジャングルを越えなければならない場合もあります。このような地理的・社会的条件のペルーにとって、人口センサスの実施は、依然として極めて難易度の高い国家事業のひとつであり、センサス調査の実施方法の改善と統計データの集計率と精度の向上が大きな課題となっています。

2. 調査票

最後に2017年人口・住居センサスで使われた調査票の概要に触れたいと思います。センサスで各種統計データを集計するにあたり、その要となるのが調査票です。2017年の人口・住居センサス調査票は、I:住居の所在地と世帯数、II:住居の特徴と公共サービスへのアクセス、III:世帯の特徴、IV:世帯の構成員、V:世帯の構成員の特徴という5セクションに分かれ、61の質問で構成されました。その概要は表2のとおりです。

2017年人口センサスの特筆事項としては、本調査票のセクションVで、「民族のアイデンティティ」に関する質問が初めて採り入れられたことがあります。ペルーには、国内に多様な言語を話す先住民族コミュニティが存在することから、20世紀以降に実施された人口センサスの調査票には、質問方法にバリエーションはあるものの、言語に関する質問が常に採り入れられてきました。しかし、言語だけでは、スペイン植民地期の16世紀から18世紀にかけてアフリカから連れてこられた人々を祖先とするアフロ系ペルー人の人口は特定不可能であり、先住民が幼少期からスペイン語を学んでいる場合が多いため、民族統計の専門家たちは、「言語」と「民族への帰属の自己認識」の両方の観点から民族に関する調査を行う必要性を指摘していました(INEI 2018b)。

民族的帰属意識を問う質問は2012年以降、全国世帯調査(Encuesta Nacional de Hogares: ENAHO)で採り入れられてきましたが、先住民族やアフロ系ペルー人は特定地域に集住する傾向があるため、サンプル調査である世帯調査は全数を推計するうえで統計的有意性を持たないという課題がありました。ペルー政府は、2017年人口センサスの全数調査に民族統計を採り入れることを視野に入れて、2013年から2016年まで民族統計に関する省庁間

セクション	質問内容
I. 住居の所在地と世帯数	地理的位置情報(県・郡・地区・居住地) 都市か農村部かを選択 住居の住所、世帯数
II. 住居の特徴と公共サービスへのアクセス	住居のタイプ 住居の居住状況(居住中、空家) 建材(壁、屋根、床) 水道・電気、トイレの状況と公共サービスへのアクセス
III. 世帯の特徴	調理に使用するエネルギー・燃料 各種家電製品の所有の有無 過去5年に海外移住した家族の存在と人数
IV. 世帯の構成員	居住者(センサス実施日の前日から当該住居に居住)の人数と氏名
V. 世帯の構成員の特徴	家長との関係・性別・誕生日・年齢 この地区にずっと居住か、いない場合にどこに居住移住(5年前に居住していた地区・郡・国) 自分が生まれたとき母親の居住していた地区・郡・国 社会保障制度への加入の有無 6つの機能領域(見る・聞く・話す・歩く・認識する・コミュニケーション)における障害の有無 身分証明書(DNI)の番号、身分証明書所持の有無 幼少期に話していた言語(3歳以上) 読み書きができるか(3歳以上) 学歴、就学中の場合は学校所在地(地区・郡)(3歳以上) 労働・雇用に関する情報(5歳以上) 婚姻関係(12歳以上) 民族的帰属の自己認識(12歳以上) 宗教(12歳以上) 出産した子ども・存命の子ども数(12歳以上女性)

表2 2017年人口・住居センサス調査票(出所: INEI 2018c)

技術委員会(CTIEE)を組織し、複数の政府機関や国際機関の専門家・代表を交えて準備を進めてきました(INEI 2018b)。その結果、調査票のセクションVに以下の質問が採り入れられることになりました。

民族的帰属の自己認識に関する質問(12歳以上)

「あなたの習慣と祖先から、あなたは以下のどの民族に帰属すると感じていますか?あるいは認識していますか?」

1. ケチュアですか? 2. アイマラですか? 3. アマゾンのナティーボ(nativo)または先住民

(indígena) ですか？ (具体的民族集団名記載) 4. その他の先住民族 (pueblo indígena) または原住民族 (pueblo originario) に帰属、またはその一員と認識していますか？ (具体的民族名記載) 5. 黒人、モレノ (浅黒い肌の人)、サンボ (黒人と先住民の混血)、ムラート (白人と黒人の混血) / アフロ系ペルー人、またはアフロ系子孫ですか？ 6. 白人ですか？ 7. メスチーソ (白人と先住民の混血) ですか？ 8. これら以外ですか？ (具体的記載)。

言語に関する質問はこれまでも人口センサスの調査票に採り入れられてきましたが、2017年人口センサスでは、調査票のセクションVで以下の質問がされました。

言語に関する質問 (3歳以上)

「幼少期に母語として学び、話していた言語は以下のどれですか？」

1. ケチュア語、2. アイマラ語、3. アシヤニンカ語、4. アワフン語 / アグナルナ語、5. シピボコニボ語、6. シャウィ語 / チャヤウィータ語、7. マチゲンカ語 / マチゲンガ語、8. アチュアル語、9. 他の先住民言語 (具体的に記載)、10. スペイン語、11. ポルトガル語、12. 他の外国語、13. ペルー手話、14. 聞こえない / 話せない (INEI 2018c)

人口センサスで言語に加え人種・民族に関する統計調査を取り入れる傾向は、今世紀初頭より他のラテンアメリカ諸国ですでに始まっていました。早い国では2001年にエクアドルとアルゼンチン、2010年にはベネズエラが人種・民族への帰属の自己認識に関する質問を採り入れています。この傾向は国内の人種と民族の多様性をとらえようとするラテンアメリカの多文化主義的潮流の一環と解釈することができます (遠藤 2021)。

今回は、2017年人口センサスの集計結果を報告します。

<参考文献>

- 伊藤伸介 (2017) 「公的統計における行政記録データの利活用について—デンマーク、オランダとイギリスの現状—」『経済学論纂』(中央大学) 第58巻第1号。http://id.nii.ac.jp/1648/00008881/
- 遠藤健太 (2021) 「米国とメキシコで実施された2020年国勢調査の政治的諸相」『ラテンアメリカ・カリブ研究』28号、84-97
- 土佐美菜実 (2021) 「第1回 シンガポール社会の変化を

告げる人口センサス」(連載 途上国・新興国の2020年人口センサス) 2021年1月 <https://www.ide.go.jp/Japanese/Library/Column/2021/1020.html>

高橋理枝 (2022) 「第10回 アラブ初の調査票なき人口センサス—バーレーン、オマーン」(連載 途上国・新興国の2020年人口センサス) 2022年11月 <https://www.ide.go.jp/Japanese/Library/Column/2022/1121.html>

村井友子 (2022a) 「第8回ペルー：2017年センサス (上)：2017年センサスと人口調査実施の歴史」(連載 途上国・新興国の2020年人口センサス) 2022年10月 <https://www.ide.go.jp/Japanese/Library/Column/2022/1011.html>

—(2022b) 「第11回ペルー：2017年センサス (中)：人口動態と民族統計」(連載 途上国・新興国の2020年人口センサス) 2022年11月 <https://www.ide.go.jp/Japanese/Library/Column/2022/1024.html>

—(2022c) 「第7回メキシコ—コロナ禍に敢行した2020年人口センサス」(連載 途上国・新興国の2020年人口センサス) 2022年3月 <https://www.ide.go.jp/Japanese/Library/Column/2022/0330.html>

藤田峯三 (2006) 「ラテン・アメリカの2000年ラウンド人口・住宅センサス—現状と2010年ラウンド人口センサスに向けての展望—」 https://www.hosei.ac.jp/toukei_data/shuppan/g_shohofujita2.pdf

Instituto Nacional de Estadística e Informática (2018a)

La Autoidentificación étnica : Población Indígena y Afroperuana : Censos Nacionales 2017 : XII de Población, VII de Vivienda y III de Comunidades Indígenas, INEI. https://www.inei.gob.pe/media/MenuRecursivo/publicaciones_digitales/Est/Lib1642/libro.pdf

—(2018b) *Censos Nacionales 2017 : XII de Población, VII de Vivienda y III de Comunidades Indígenas*, INEI. https://www.inei.gob.pe/media/MenuRecursivo/publicaciones_digitales/Est/Lib1437/libro.pdf

—(2018c) *Perú, Resultados definitivos de los Censos Nacionales de 2017 : XII de Población, VII de Vivienda y III de Comunidades Indígenas*, INEI. https://www.inei.gob.pe/media/MenuRecursivo/publicaciones_digitales/Est/Lib1544/libro.pdf

United Nations Statistics Division (Prepared by) 2022.

Handbook on Registers-Based Population and Housing Censuses (Second draft—subject to final substantive and copy editing)

<https://millenniumindicators.un.org/unsd/statcom/53rd-session/documents/BG-3e-Handbook-E.pdf>

女の子にも教育を

—グアテマラ土曜学級の視察より—

新川 志保子

3月18日にレコムが支援しているチマルテナンゴ県ポアキルの土曜学級の視察を行いました。オヘル・カイバル村で今年3年目です。

授業は2月11日から始まっています。コロナ規制がなくなったので、今年は全員揃っての授業となり、マスクも不要になっていました。去年は規制のために、クラスを11人ずつ3グループに分けて交代で授業をしていたので、1グループあたりの時間が短かったのですが、今年からはそれもなくなり、みな朝8時から正午まで授業を受けられます。

子どもたちが楽しみにしている給食も再開しています。クラスは33人で、そのうち女の子は19人、男の子は14人です。年齢は7歳から10歳までで、小学校1年から3年くらいの内容を教えます。今年も場所は小学校の施設を使わせてもらっています。

これまで年間50万円の予算でやってきましたが、去年は円安のあおりをくって予算が増え、75万円に跳ね上がってしまいました。また、グアテマラも物価が高騰しているため、来年はかなりの増額が必要になる見通しで、来年以降の継続が危ぶまれていました。ところが、アーユス仏教国際協力ネットワークの『街の灯』支援事業の助成金をいただけることになりました。年間50万円で3年間の継続です。おかげで、来年以降も続けることが可能になり、一同ほっとしているところです。

小学校の教師と連携

今年から、子どもの受け入れについて新しい取り組みが始まっています。小学校授業についていけない子どものリストを出してもらい、ヨヘーロ先生が親と面談しながら、家庭の経済状況なども考慮して、最も土曜学級に



給食風景

来ることが必要と思われる子どもを受け入れることにしたのです。去年、一昨年と、コロナ規制のため、小学校ではほとんど授業ができおらず、読み書きができないまま進級した子どももいて、グアテマラの公共教育や教育システムの問題もあって、小学校でいったん落ちこぼれた子どもたちの学力を上げるのは非常に難しいことだからです。

土曜学級に来ている子どもたちの学力の向上に教師たちも目をみはり、落ちこぼれの子どもの出さないために土曜学級を頼みにしているところがあります。

女の子の教育についての重要性

土曜学級を運営しているのはグアダルーペ共同組合です。1980年代、内戦で軍に夫を殺された女性たちが生き延びるためにグループを作ったのが始まりです。女性の経済的自立のための活動が中心ですが、子どもの教育、とくに女の子の教育にも力をいれてきました。これはメンバーの女性たちが農村部の先住民女性で、小学校もろくにいておらず、ほとんどがスペイン語を話せなかったために、とても苦勞したという経験があったからです。

1995年から2010年まではスペインのNGOの支援で奨学金プロジェクトを行い、200人以上の貧しい家庭の少女が高等教育を受けることができたということです。

土曜学級の教師、エルサ・ヨヘーロさんも、グアダルルーペ組合の奨学金で大学まで行くことができた一人です。小学校を一緒に卒業した女の子で上の学校に進めたのは彼女一人だけだったそうです。そのヨヘーロさんも、お父さんが女の子に教育は必要ない、と彼女の教育に消極的だったのですが、お母さんががんばって説得してくれたのでした。それ以来、女の子が教育を受ける難しさを実感してきたと言います。

教育はまず男の子を、というのは今にいたるまで農村部では根強くある考えです。オヘル・カイバル村のクラスも、最初の年はコロナ規制が厳しく、グアダルルーペ組合のメンバーも訪問することができなかつたため、受け入れる子どもたちは村の役員会が決めることになりました。その結果、30人の子どものうちほとんどが男の子となってしまいました。が、それではまずいとヨヘーロ先生が役員会と親にかけあい、説得して、男女が半々になるようにしたという経緯があったのでした。

国立統計院 (INE) によると、グアテマラ全体では女性の識字率は78% (男性は85%) ですが、先住民女性だとこれが48%となります。つまり現在に至るまで、マヤ女性の半数以上は読み書きができないということです。これは2022年の統計ですが、2012年の統計も先住民女性の識字率は同じで、10年たってもほとんど向上していないことがわかります。

就学年齢の子どもが学校に行かないおもな理由は貧困です。2022年度に小学校に行った先住民の女の子は、就学年齢児童全体の11.6%に過ぎません。昨年はコロナ禍で不況により学校に行けない子どもが多かったであろうことは想像に難くありません。今年の統計はまだ出ていませんが、昨年以上に物価が上



クラスの様子

がり、経済状況は厳しいので、就学率が上がる見込みもありません。状況が厳しくなるほど、教育から弾き出されるのは女の子、その中でも先住民の女の子、ということになります。

このような状況に加え、単に学校に行くということが、そのままそれ相当の学力を身につけられるわけではないことを考えると、オヘル・カイバル村での土曜学級がどれほど重要かと改めて感じます。

土曜学級では、女の子も男の子ものびのびと元気に勉強しています。週に一回だけの授業ですが、ヨヘーロ先生がきめ細やかに一人ひとりの子どもに目を配りながら、どの子どもも授業内容が理解できるように頑張っています。この土曜学級は、子どもたちに教育を！というグアダルルーペ組合の努力に支えられています。そして、それを経済的に支えているのが日本の私たちの支援です。



ヨヘーロ先生と母親

アルゼンチンでデイジーと知り合う

1976年2月上旬にチリへ向かうことにしました。アルゼンチンではたった1ヶ月と少しの滞在でしたが、宿の台所でのお付き合いは、いつの間にかずいぶん打ち解けたものになっていました。

チリからきたデイジーという女性は、普段は明るくて冗談を言ってよく笑う人でしたが、時々神経質に「わたしはドキュメントがないから」ということがありました。「でもカルロスと結婚したから、結婚証明書がそのかわりになる」とも。

中南米だいたいこの国でも身分証明書を持つことが義務とされていました。わたしたちが通って来た国々でこの携帯義務がなかったのは唯一ニカラグアでした。ソモサ独裁政権の時代でしたからとても驚いたのです。ニカラグアで親しくなった青年が、そのことだけは誇れると言った言葉はいまも忘れられません。身分証明書の提示を求められたとき持っていないとなると、なかなか厄介なことになることが多いのです。

わたしたちがまもなくチリへ向かうと知って、デイジーから「ぜひ実家の家族を訪ねてほしい」と頼まれました。

1973年9月11日、ピノチェット将軍の率いる軍部は、正当な選挙によって選ばれた社会主義を掲げるアジェンデ政権をクーデターで倒しました。アジェンデ政権を支持した人びとへの残虐な弾圧を伝えるニュースは、当時メキシコにいた私たちにも届いていました。

デイジーの家族は父が労働組合のリーダーであり、家族全員アジェンデの支持者だったそうです。いつ何があってもおかしくない状況下で逮捕されたのがデイジーだったのだそうです。彼女からは、捕まって何ヶ月か拘束されていたが、ある日バスに乗せられてアルゼンチンとの国境まで来て、そこで目隠しされてバスから降ろされ、置き去りにされた、とだけ聞いていました。

出発前にはデイジーの夫カルロスの両親の家に、仲良くなっていたウルグアイ人夫婦、スペインから移住して40年余のドニャと一緒に招かれ、アルゼンチンの代表料理とも言えるアサード、焼き肉料理

をみんなで楽しみました。アルゼンチンのアサードはお肉のおおきな塊はもちろんのこと、大腸や三つ編みにした小腸、血入りソーセージなど、なじみのないものも多く、その美味しさにもびっくりしたものです。一緒に出される香草のソースがとても美味しかったのですがその香草はアルゼンチン独自のものらしく、その後どこでも口にすることがなく残念でした。

お別れだからと言って、カルロスとデイジーの結婚式の時のシャンパンまで出してもらって、たった1ヶ月余のお付き合いだったのにこんなにお名残惜しいおいしいなんて！

デイジーの家族を訪ねる

アルゼンチンからチリへ入るルートはいくつかあるのですが、今回はデイジーの実家をたずねるために、かなり南のネウケンを通過して国境を越えました。国境を越えるとき荷物検査など厳しいと聞いていたのですが、てきぱきと事務的に手続きは進み、問題になることはなくほっとしました。

一番問題になりやすい書籍はすでにブエノスアイレスから日本へ送っていたので、持ち物は旅の日に必要なものだけです。同じバスに明らかに先住民と思われる青年がふたりいました。彼らはチリからアルゼンチンへ職を求めてきたのですが、パスポートを持っていないので強制送還されて帰るところなのだと聞いていました。

いよいよチリに入り、緊張しながらテムコに着きました。それからどうやってデイジーの家族のもとにたどり着いたのかあまり記憶にないのですが、アルゼンチンからデイジーの友人が来てくれたと、大喜びで迎えられました。

ひとしきりデイジーがどうしているか、わたしたちが同じ宿でどんなふうに友達になったか、夫カルロスと仲良くしているか、困っていないか、会えない日々の様子をどんなことでも知りたい気持がありありと見えます。どんなに心配なことでしょう。追放されてだれも知る人のいない異国の地に突然放り出されて、身分証明書もない我が子を助けることもできない辛さ。

そんな家族の皆さんに、さいわい彼女は良い相手に巡り合い、家族となって2カ月後には子どもも生まれる。彼の両親とも良い関係を保ち、カルロスには仕事がある、周りの人たちにもとても愛されている。そんなひとつひとつの日々の何気ない知らせが、どんなに大きな安堵をもたらしたのか、思わず一緒に涙をこぼしてしまいます。

デージーの家族は両親、二人の妹、結婚して独立している兄夫婦、です。父親は労働組合の活動家、兄は教師で文化活動に力を入れていたし、母親も年若い姉妹もアジェンデ政権を支持していた。アジェンデ政権が長い時間をかけて特に若い人たちの間に支持を生み出し育てていったのでしょうか。彼が政権の座につくまでには、長い長いチリの人びとの戦いの歴史があることが感じられます。

クーデター当時どんなことがあったかのかを、家族みんながそれぞれ話したくてたまらない様子でチリの有様を語ってくれました。ところがあの日々を語りだすと、年若い方の妹がそっと母の肘をついたり、心配そうに顔を見るのです。すると母が「大丈夫よ、この人たちは大丈夫」と言うのです。

そして私たちに、「いまここでは安心して口を開くことができないの。心の分かった人たちと話すのはいいけど、そうでないときは、本当の気持ちは出さない。この人は大丈夫かなと、心配な人と会うことを断ったり、家に入れなければ、またそのことで疑いをかけられ、どんな密告をされるともかぎらない。笑顔で当たり障りのない話をするだけよ」と、言います。

それぞれの語ってくれた言葉を記します。(当時の日記より)

母: デージーが捕まったのも、あの子に横恋慕して相手にされないのを恨んだ男が密告したせいなの。あの時わたしたちはデージーがどこへ連れて行かれたのか、必死で探したのよ。軍は逮捕した人たちに食べるものも与えないから、みんな必死で探して居場所を突き止め、食べ物の差し入れをした。捕まっている人たちの中には、遠いところから連れてこられて家族も友人にも連絡が取れない人だっていたし、差し入れだっていない人がいるから、中ではみんな食べ物で分け合って励ましあっていたそうよ。

でもあの日、チェチョ(父親の名前)がちょうど出張中でいなかったのは、かえって幸いだった。彼

は自分の目の黒いうちはこの家のものはやつらには誰ひとり連れて行かせないと言っていたし、彼は本当にそうしたでしょう。そうなったらわたしたちみんな殺されていたでしょう。

それまで善良な使用人だと、ばかり思っていたものや、同じ労働者だと思っていたもの、役人たちが、善良そうな仮面を脱いで、スパイの本性をあらわして、これとこれ、これは過激派、あれとそれは共産主義者だ、過激派だと密告して、つぎつぎに人びとが引っ張られていった。

やつらは気の向くままに拷問し、バラ線で縛ってヘリコプターに乗せ、海に突き落とした。わたしたち、あの頃はとても魚を食べられなかった。魚はそうやって殺された人たちを食べていたのだから。

なにより恐ろしかったのは、朝8時半にニュースを必ず聞かなければならなかったこと。その時間に氏名が読み上げられ、何時間以内に出頭せよ、と言われるのよ。出頭しなければすぐに軍がやってきて拘束するか、その場で殺されたりする。

そうして、その時その時で変わる外出禁止時間が読み上げられる。うっかりそれを聞き逃して、その時間に外出しようものならすぐ逮捕されたの。

いまもそうだけど子どもや女の人たちが物乞いに来るの。食べ物をめぐんでくださいって。親を奪われた子どもたちや、家族をなくしたお年寄り、家にもくれば必ずあるものを分けるの。

うちの子どもたちも、なにしろ全員アジェンデ政権支持者だって知れ渡っているから、職場なんて見つからないのよ。でもなんとか食べて行かれているし、あるものはみんな分けるしかないのよ。どうしようもなくなったら? その時はその時。いまはできることをするだけ。(この項続く)



1973年9月28日、パレパライソ競技場に移送された逮捕者

(出典: The Guardian, 2018年11月11日)

ラテンアメリカにおけるフェミニズムをめぐる歌の旅(2)

3月20日にラテンアメリカ探訪で「スペイン語圏に学ぶ家父長制批判のABC：搾取から女性解放論を考える」と題して第1回イベント、「アルゼンチン：反植民地主義と身体」を行った（話者はエビハラヒロコさん。第2回「スペイン：反資本主義と階級」は4月24日を予定）。185回を越える同会の中でも申込者数が60名を越えるというもっとも多くの人に見ていただけるイベントになり、日本社会においてもこのテーマへの関心が決して低くはないことがわかって少しホッとしつつ、それでもなおこの状況である、ということの難しさを改めて実感することとなった。

ラテンアメリカの根強い家父長的抑圧と日本のそれは似ているようで、背景や文化、意識などのさまざまな面で大きな開きがあることを痛感するが、だからこそ、私たちは彼の地の実践から学べることが多くあるのだろうとも思う。日本ではまだまだ問題として認知すら広まっていないフェミサイド（女性憎悪殺人）は、日本でも実際広く見られる問題でありつつ、そういった統計もなければ、その視点に基づく報道もない（もしくは非常に少ない）。社会がそういったまなざしを持つことを恐れ、女性への差別や暴力は女性の自己責任に転嫁しようとしている気配を日々ビンビンと感じている。

そんななかで、プエルトリコのシンガーソングライター、イレ（iLe、本名イレアナ・カブラ）が歌った「Temes（おまえは恐れる）」のPVは非常に衝撃的である。もともとメッセージ性が非常に高いラップユニット、カジェ・トレセ（Calle 13）のサポートメンバーでもあった彼女は、ソロデビュー後もカジェ・トレセ同様強いメッセージ性が大きな魅力の歌手となった。そんな中でも「Temes」は、男性が女性を恐れるが故、屈服させようとするその心理を歌っており、PVはあきらかにレイプされた女性がひとり残されるところから始まるショッキングなものとなっている。家父長制的抑圧は常に性暴力と一体化して女性を支配していることを告発する過激な仕掛けを突



iLeのアルバム Ilevitable

きつけられると、私たちは、自分たちがこの制度にどのように加担しているのかを突きつけられているかのように思っ、たじろいでしまう。しかし、Noを言わぬことは、その体制の容認/追認を意味し、それは差別と暴力が続いていくことを認めることを意味する。そのことの重要性が否応なく眼前に立ち現れ、見る者を揺り動かさずにはいられないのだ。

夜道で襲われる女性の恐怖という現実、前回紹介した曲でも繰り返し登場する、女性たちを取り巻くリアルな恐怖を正面から描き、ないことにはさせないという作品群である。ロサンジェルスで活動するチカーノ・トリオ、エル・ハル・クロイ（El Haru Kuroi）も「El Cu Cui」でそうした女性の恐怖を描き出している。ククイとは、日本でいうと「袋のおっちゃん」など、いうことを聞かずに外に飛び出したりした子どもたちを誘拐する存在だ。PVを見ると、一見ナマハゲのような仮面をかぶった精霊的姿をしているが、歌の中で狙われるのは子どもではなく女性だ。夜道を歩く女性が、ククイにさらわれる。それが何をメタファーとしているかは言うまでもない。こうした現実があることを、そしてそれを放置している社会を、まずは可視化していく。

それはエル・ハル・クロイの「Ella（彼女）」

でも同様だ。高級住宅街で働く褐色の肌のラテン系女性は、早朝から夜遅くまで人の家のあらゆることを行った後、夜遅くに帰宅すると、家で待つ彼女のこどもたちとようやく向かい合う。女性の中にある階級と搾取の構造がここでは強烈に描き出されており、その中でそれをとにかく日々こなしながら生き延びているたくさんの透明化された「彼女」たちによって富裕層の豊かな日々が営まれていることを描き出されている。

また、今年チリのビジャ・デル・マル音楽祭で銀のカモメ賞（金賞）を受賞したペルーのミレナ・ワルトン（Milena Warthon）の「Esta soy yo（これは私）」も、リマで住み込みの家政婦として働く少女たちが学校にも通えなかったり、性暴力を受けながら逃げ場のない生を送らざるをえなかったりする状況を歌い、その問題の深刻度が伝わる内容となっている。

こうした女性をとりまく状況と闘うラッパーとしてもう一人あげておきたいのは、エクアドルのラ・マフィアンディーナだ。タキ・アマールと DJ ミックが女性への差別や暴力を告発し可視化し、闘っていくために結成したという非常に闘争的性格が強だけでなく、スペイン語とキチュア語という二言語で歌われているということも、非常に重要な問題だ。

「Warmi Hatari（立ち上がれ女性）」の中では、女性を支配・所有しようとするために愛が使われることの告発、そしてメディア、暴力、国家、経済、政治といったあらゆるものが家父長制の下での差別と暴力、女性の疎外を正当化するために機能していることを示し、目覚め、連帯し、行動に移していくことで、家父長社会とその中で作られた自分を解体していくことを歌い上げている。

家父長制への反旗の歌としては、チリで活動するラッパー、アナ・ティジュによるそのものズバリのタイトル、「Antipatriarca（反家父長制）」という曲がある。自律したプロtagonista（自らの人生の主人公）としての自分を取り戻すことを、どう生きるのか、何がダメなのかを、明確に輪郭を描きながら提示している。それによって、従うもの、劣ったものではなく、対等で、自律して、自分自身の生を生きることが出来る一人の全うたる人間として生きることが宣言している。



エル・ハル・クロイのアルバム Sabung



アナ・ティジュのアルバム Antipatriarca

1973年のチリのピノチェトによる軍事クーデターとその後の弾圧を逃れてフランスに亡命した活動家の娘として生まれたアナ・ティジュは、民政移管した後の1993年にチリに帰国、ヒップホップを使ったプロテストラップを武器に、チリが抱える数多くの問題を告発しており、チリの社会運動や先住民運動と連帯しながら活動を続けている。

今回は各国の21世紀の作品を中心に気になるものを紹介させていただいた。次回はペルーの作品を中心に紹介していければと思っています（もし気が変わったら申し訳ありません）。ぜひ、今日ご紹介した曲をYouTubeでも試聴してみてくださいと思う。

詩人パブロ・ネルーダの死因は毒殺か？

チリのノーベル文学賞詩人パブロ・ネルーダ (1904~73) は、アウグスト・ピノチェー陸軍司令官 (1915~2006) 麾下の軍部による流血のクーデターが勃発した 1973 年 9 月 11 日から 12 日後の 9 月 23 日に謎の死を遂げた。1970 年 11 月から人民連合社会主義政権を率いていたサルバドール・アジェンデ大統領 (1908~73) は、政変初日、大統領政庁ラ・モネーダ宮殿の執務室の窓から自動ライフル銃を発射して抵抗した後、その銃で自害した。

今年、このクーデターとネルーダの死から半世紀。またジェームス・モンロー米大統領によるモンロー教義宣言 (1823 年 12 月) の 200 周年でもある。チリの悲劇は同宣言 150 周年に起きた。当時のリチャード・ニクソン米大統領とヘンリー・キッシンジャー大統領補佐官は、チリ軍部の陰謀に加担していた。つまり政変は、モンロー教義の下で決行された惨劇だった。そしてネルーダは毒殺されたのか。いま、判断が待たれている。

ネルーダは 1973 年 9 月 19 日入院していた首都サンティアゴのサンタマリーア病院で死亡。軍政は「末期の前立腺癌と転移」が死因と発表した。だがネルーダの専用運転手で側近だったマヌエル・アラヤ (現在 77 歳) は 2011 年、メキシコのプロセソ誌に「病室で最後に会ったネルーダは私に〈夜半入室してきた男たちから胃に注射され、腹が焼けるようだ〉と訴えた。私が医師に外出させられた後、ネルーダは死んだ。ネルーダ夫妻は翌 24 日メキシコに亡命することになっていた」と証言。ネルーダが幹部党員だったチリ共産党は、同誌報道を受けてアラヤの証言を確認し、同年にネルーダの死因調査を裁判所に求めた。

アラヤは 2012 年『ネルーダの二重の暗殺』という本を出し、キャンペーンを張った。筆者は翌 2013 年、太平洋岸の港湾都市バルパライソでアラヤにインタビューし、著書を贈られた。彼が展開する「毒殺説」は興味深かった。「ネルーダは世界的名声と発言力からメキシコに亡命すれば軍政の強力な敵になる」とピノチェーら軍事評議会の面々は恐れ、詩人を葬つ

たに違いない。そうアラヤは見ている。

調査担当のマリオ・カローサ判事は 2013 年 4 月、バルパライソ南方の太平洋岸の村イスラ・ネグラに残るネルーダ邸 (現ネルーダ邸博物館) 庭の墓の発掘を命じ、内外の専門機関に遺骨の分析を求めた。この時は毒殺の可能性を示す痕跡は見つからなかった。

遺骨は 2015 年に墓に戻されたが、複数の検体が保存された。ネルーダの遺族で甥のロドルフォ・レイエス弁護士、アラヤ、共産党は再調査を求め、2017 年の 2 度目の調査で、検体の臼歯からボツリヌス菌の痕跡が見つかった。そして 2023 年 1~2 月、3 度目の調査をチリ、デンマーク、カナダの機関が実施、ボツリヌス菌の痕跡が他の検体からも発見され、暫定結果として 2 月 15 日「ネルーダは毒殺された可能性がある」と発表された。

アラヤ証言に加え、数ある状況証拠にはエドゥアルド・フレイ＝モンタルバ元大統領がサンタマリーア病院で 1982 年 1 月に軍政によりマスタードガスで毒殺されたとほぼ断定された事件が明るみに出るという強烈な状況証拠も含まれている。アジェンデの直前の大統領だったフレイは、軍政を当初支持していたが批判に転じ、非合憲大統領に収まったピノチェーから目の敵にされていた。フレイは食道裂孔ヘルニアで 1981 年 12 月に入院したのだが、容態が急変して死に、その死因に疑いが持たれていた。

政権 2 年目のガブリエル・ボリッチ現大統領や連立与党の共産党は、9 月のクーデターおよびネルーダ死去の 50 周年までに詩人の死因を確定させる構え。3 国調査団は 3 月中に最終結果を発表する予定だったが、日本時間 4 月 7 日現在、発表はない。20 世紀最大の詩人の一人であるネルーダの死因確定作業は、科学的証拠と状況証拠の間で揺れているかに見える。

編集部注

この記事に関しては、「詩人パブロ・ネルーダは毒殺されたか？【あなたに知ってほしいラテンアメリカ】伊高浩昭×高瀬毅」の動画が参考になる。

https://youtu.be/FdfSGK_Fvy0

牛肉のウスターソース味

CARNE DE RES CON SALSA INGLESA

そんりさの読者のみなさんお元気ですか。

きょうのメキシコ料理は牛肉をつかったレシピです。牛肉がメキシコにもたらされたのは植民地時代のことです。それより以前、アステカやマヤなど時代には、メキシコには牛肉は存在しませんでした。

おいしい牛肉がもたらされることで、メキシコ料理はいっそうバラエティ豊かになりました。

メキシコでは国中に数多くの牛肉料理がありますが、今回のレシピはユカタン州のものです。



▽材料 (4人分)

- ・牛肉薄切り 400g
- ・玉ねぎ 1/2 個
- ・ウスターソース 大さじ4
- ・赤ラディッシュ 好みの量
- ・レタス (水菜でもよい)
- ・ニンニク 2かけ
- ・水 1/2 カップ

▽作り方

- ① ラディッシュを花形に切って (写真参照)、最低1時間ほど水につけておく。そうすることによって花びらが開いたようになる。
- ② 玉ねぎの皮をむき、薄切りに。ニンニクはみじん切り。
- ③ フライパンで牛肉を軽く炒める。料理が脂

っこくならないように、油はつかわず、肉にふくまれる脂で炒めてしまう。

- ④ 肉の色が変わったら、玉ねぎとニンニクを加える。玉ねぎやニンニクがかたくなならないように水を入れ、よく混ぜる。
- ⑤ ウスターソース (大さじ4) を入れて混ぜる。肉と玉ねぎとニンニクにソースがしっかりしみこんだら火を止める。
- ⑥ レタスは細切り。今回のレシピでは、季節の野菜ということで、レタスではなく、水菜をつかった。
- ⑦ できあがった肉を深めの皿に盛りつけ、レタス (水菜) やラディッシュをその上にトッピングする。
- ⑧ 白ごはんやトルティーヤ、フランスパンとよく合います。

奪われた夢—ニカラグア独裁の凋落

これは、オルテガ=ムリージョ一族と支持者の物質的利益のために、サンディニスタ革命の夢が奪われていることを理解してもらうため、Alianza Otras Miradas 傘下の独立系メディア 6 社（メキシコ、グアテマラ、スペイン各 1 社、ニカラグア 3 社）が 3 月下半期に発行したレポート 11 篇全体の表題である。

2 月の政治犯 222 人国外追放と国籍剥奪に示された人権侵害や残忍な抑圧や権力上層部の腐敗などで、ニカラグアの独裁体制は国際的・国内的にも孤立、完全に凋落している。

以下 11 篇の冒頭はウルグアイの研究者ラウル・シベッチの総論、最後はグアテマラのラジオ・オコアテによるインタビューを収録した Podcasto (33 分) となっている。

① 独裁者に背を向ける LA 左翼

LA 左翼はキューバとベネズエラを一定の留保で「支持」するが、ニカラグア独裁体制に背を向けている。2008 年のサンディニスタ刷新運動 (MRS) の政党資格剥奪に際し、元 FSLN 司令官ドラ・マリア・テレスは、オルテガが司法・選挙・監察などの権力を懐柔し「制度的独裁体制」を目指していると抗議し、E.ガレアーノ、N.チョムスキー、S.ラシュディ、M.ベネディティなどの知識人が彼女の抗議を支持した。2018 年の反政府デモ弾圧を契機に、LA の大半の左翼は独裁体制に対する批判から非難に転じ、元ウルグアイ大統領ムヒカは上院で「気分が悪い。夢が逸れてしまったようだ。...私も潮時のようだ」と嘆いた。2021 年 6 月、野党の大統領候補者や MRS 関係者の逮捕・自宅軟禁を受け、ウルグアイの左翼知識人は、「またもや一撃、また沈黙するの?」と題する声明文を発表した。2023 年 1 月のラテンアメリカ・カリブ諸国共同体首脳会議で「進歩派」諸国はオルテガ体制に違和感を表明した。

② 略奪を隠蔽する反帝国主義的レトリック

大西洋岸のエビ資源、金鉱山、大西洋岸自治地区の森林資源、ニカラグア運河建設系買収 (9 年で霧消) など、限られた資源を売り渡

す姿勢は明白である。

③ 「左派」政権に潰された社会運動

1998 年、オルテガによる妻ムリージョの長女ソイラメリカ・ナルバエスのレイプの告発、2006 年 10 月の FSLN の工妊娠中絶禁止法案支持などフェミニズムと敵対してきた。2007 年の政権復帰後、労働争議は現在まで皆無と完全に懐柔、農民運動も同様に懐柔され、運河建設に関連する土地接収反対運動もテロリスト扱いされた。2018 年の叛乱は、年金生活者と 1980 年代の「革命」を知らない 21 世紀生まれの若者世代によるものである。

④ 団結を目指す反対勢力

独裁者を引きづり下ろすという目的を共有するが、方法に関して暴力的な方法での政権打倒、国際的制裁や金融制裁といった方法による締め付け、民主主義への移行に向けた交渉などで立場が異なり、統一できていない。

⑤ エクアドルからの視点

エクアドルの元女性囚コレクティボによる権力と性暴力の乱用に関する考察。

⑤ ニカラグアには別の歌

2007 年以降はサンディニスマでなく、ダニエリスモであり、もはや Canción Urgente (シルビオ・ロドリゲス) と無縁の状態。

⑥ ダニエル・オルテガ体制を支える人脈

政権に復帰後の権威主義体制を支える司法、立法、選挙権力の関係者、軍・警察関係者、市民権力審議会、企業関係者について。

⑦ ESLN 旗は若者には抑圧シンボル

ニカラグアのコーヒー摘み取り国際支援団に参加経験者 Claudia Korol のインタビュー。

⑨ 深刻な貧困化

オルテガ体制は「革命勢力」や「進歩勢力」と無縁の恩恵主義的ポピュリスモと指摘。

⑩ オルテガを完全に孤立させるべき

国籍剥奪・資産接収された詩人ジオコンダ・ベリ、国際社会はかつての独裁者ソモサに対するものと同じ対応を取るべきと主張。

⑪ ニカラグア—夢の裏切り Podcast

出典：<https://bit.ly/3TiInvO>

編集後記

日本で暮らすかぎり、移民や難民、国籍剥奪・国外追放や亡命という言葉を自らのものとして実感する機会はとても少ないが、LA 諸国ではそうとはいえない。

「いかなる人も不法な存在ではない」は、2018年12月に国連で採択された「世界移民協定」のフレーズで、「移民は権利、犯罪ではない」と続く。実際は、移民や難民をめぐる否定的な状況が支配的なことは明白である。右のイラストにある「世界中が私たちの故国」という言葉を実感できるのはまだ先のようなのである。



(小林 致広)

今回の「そんりさ」印刷作業は東京で、2023年7月15日（土）

発送作業は関西で、2023年7月22日（土）の予定です。

参加いただける方は、recom@jca.apc.org まで連絡ください。

Vol. 183	いのちの踊り ビオダンサ	Vol. 180	ハイチ共和国はどんな国？
Vol. 182	「マヤ鉄道」建設は国家の安全保障問題？	Vol. 179	ニカラグア大統領選挙現地報告
Vol. 181	コロンビア大統領選挙 依然続く紛争の現場から	Vol. 178	エクアドル大統領選挙と未来の行方
		Vol. 177	コロンビア 混乱の背景

メーリングリスト

レコムに入会（もしくは購読）すると、メーリングリストにも無料で参加できます。メールアドレス、自己紹介メールを添え、recom@jca.apc.org まで、ご一報ください。メーリングリストに登録します。レコムの活動は会員のみなさんによって支えられています。

会員の種類

- ☆会 員：年 8,000 円 …会の運営、総会参加・投票、『そんりさ』購読、資料閲覧貸出
- ☆学生会員：年 5,000 円 …会の運営、総会参加・投票、『そんりさ』購読、資料閲覧貸出
- ☆賛助会員：年 10,000 円（一口）総会参加、『そんりさ』購読、資料閲覧貸出
- ☆購読会員：年 4,000 円 …『そんりさ』の購読、メーリングリスト参加可

レコム連絡先（住所が変わりました） 〒678-0001 兵庫県相生市山手2-502-1 大西方 お問い合わせは、郵便、もしくはE-MAILで お願いします。	郵便振替口座：00110-7-567396 日本ラテンアメリカ協力ネットワーク レコム口座 147万4824円 グアテマラ基金口座 39万4709円 (2023年4月現在)
ホームページ： http://www.jca.apc.org/recom E-mail： recom@jca.apc.org Facebook： https://www.facebook.com/recomsonrisa/	そんりさ (SONRISA) 184号 2023年4月22日発行 日本ラテンアメリカ協力ネットワーク (RECOM) 定価 400円